

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



「軸足で小さいステップをふまないと、身体が180°回せない」などと保存会の指導を受けながら、子ども神楽の舞を練習する子どもたち（宮城県山元町・詳しくは5頁へ）

## 特集 伝統文化が結ぶ人とまち

### ふるさと愛の象徴 ③

竹浦獅子振り（宮城県女川町）

### 思いをともに 2 地区の神楽を受け継ぐ子ども神楽 ⑤

中浜神楽保存会・坂元神楽保存会（宮城県山元町）

### 伝統とともに育つ地域 ⑦

えんずのわり（宮城県東松島市）

### まじわる災害公営住宅 ⑨

あすと長町市営住宅（宮城県仙台市太白区）

### 東北の元気 ⑩

あっちむいてホイ（宮城県石巻市）  
荒浜ボランティア婦人の会（宮城県亶理町）  
八幡杜の館（宮城県仙台市青葉区）

### 住民が支え合う生活支援 ⑬

一般社団法人はなやまネットワーク（宮城県栗原市）

### どこでもサロン ⑭

喫茶店「るまん」（岐阜県御嵩町）

### 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

### 暮らしを支える支援員 ⑯

石巻市社会福祉協議会（宮城県石巻市）

### ☆専門家に聞く地域づくりのヒント

（東北歴史博物館 学芸員 小谷 竜介さん）

特集

# 伝統文化が**結**ぶ人とまち

「伝統」と聞いて、どのようなことを思い浮かべますか？

その土地に代々受け継がれる、芸能や祭事、慣習などには、人々の心やつながりを動かす力があります。

たとえば、祭りごとにあわせて、担い手や見物客が集まることで人と人との交流が育まれ、

そんな晴れ舞台に向けて、陰で準備や特訓をすることは、大きなやりがい、ひいては生きがいになります。

同じ地域の人たちと、また、ときには地域外の人たちと、楽しみや価値観、志を分かち合う。

古くからの文化を重んじるということは、かつて地域に暮らしていた人たちの生活や、いまそこにいる自分、周りの人たちの生活を大事にすることでもあります。

継承されてきたものに参加し、絶やさず保ち続けようというかけがえのない気持ちや、支え合いの土壌をより豊かなものにします。

伝統の歴史とともに年齢を重ね、形づくられていく地域での暮らしを、今回の特集をもとに改めてイメージしてみてください。



集落中の人が思いを込めて

## ふるさと愛の象徴

◎竹浦獅子振り（宮城県女川町）

### ポイント

- 体に染みついた伝統文化が、集落の人たちを集め、つながりをより深める
- 守られてきた伝統への愛着が、一人ひとりの心や地域を支える

東日本大震災で津波の被害を受けた、宮城県女川町の竹浦地区は、高台の2つの団地に分かれて整備されることとなり、2017年5月にそれらの整備が完了して、住宅が再建された。震災以前に63世帯あった集落は、いまでは計33世帯に減少した。

### 欠かせない恒例行事

この集落では、毎年1月2日に、漁業などの繁栄や無病息災を願い、獅子振りによる春祈祷が行われる。集落の人たちが、互いの家々を1軒ずつ回り、皆で庭からたんぶつ唄というものを唱え、2台の太鼓を代わる代わる叩き、笛を吹く。その軽快で力強い音に合わせて、獅子が舞う。獅子は、玄関や縁側から家に入り、邪気を払

う。住民は、自分の家で祈祷をしてもらう順番が来ると、家族そろって、家のなかから一行を迎え、終わればご祝儀を渡したり、飲みもの、お菓子などをふるまったりする。1軒あたりにかかる時間は10分ほどで、19年1月の祈祷は、午前9時に始まり、昼食休憩を挟んで午後5時頃まで続いた。

竹浦獅子振りの春祈祷や4月の祭りなどを仕切るのは、同地区の26歳から45歳までの住民8人からなる「竹浦実業団」だが、46歳以上で長年獅子振りに取り組んできたベテラン勢や、高校生などの子ども世代も集まり、30人ほどが参加し、集落が一体となって行事を執り行う。性別や年齢の違いを超えて、息を合わせることができるとは、地域に根付いている伝統ならではだ。

「正月と言えば獅子振り」と言うほど暮らしに欠かせないもので、にぎやかなその日が終わると、若干の寂しさを感じ



竹浦獅子振り保存会 会長 阿部貞さん

竹浦実業団 団長 菊池嘉治さん

## 「獅子振りは、私たちの復興の原点」

ながらも、「これから1年間頑張ろう」という気持ちになる。現在は町外に住んでいる元竹浦住民で、当時のご近所の家で一緒に祈禱してもらおうという人もいます。

家から家へと移動する合間などに、住民同士で挨拶を交わし、談笑する時間も生まれる。集落中の人が集まるため、団地の整備によって家と家の距離が離れ、ふだんは会う機会がなくなつた人とも顔を合わせることができ、さらにはこの祈禱にあわせて東京から帰省してくる人もいるほどだ。しばらく会わなかつた人同士が久々の再会をよるこび、懐かしんだり、成長や変化に驚いたり。また、互いの近況を確かめ合い、共通の知り合いの話もあがるなど、情報交換・情報共有の場にもなっている。

### 継承が地域を形づくる

昔は集落の若手も大人に混ざって祭りごとに参加するなかで、太鼓の叩

き方や獅子頭の扱い方などを体得してきた。88年から、愛好会のような形で、担い手育成のための練習会を開始。子どもたちを主な指導対象として、技術の継承も意識的に取り組むようになった。

11年3月、震災の津波により集落の16人が亡くなり、獅子頭や楽器なども流失した。仮設住宅が整備されるまでの間、集落の一部の人たちが一緒に避難生活を送れるよう、大規模な受け入れ先を求めて、秋田県仙北市へ二次避難をした。避難先となったホテルでは、ご近所同士が隣り合うように世帯ごとの部屋を割り振り、6か月間ほど過



獅子振りを楽しみに、地域外から戻ってくる人たちも

ごした。

その避難生活のなか、あるとき何人かが集まっていた一室で、座布団やスリッパ、風呂敷などを使って、即席の獅子頭がつくられた。舞いを演じ、地元の懐かしさなどから涙しながら、故郷への思いを強め、より前向きな気持ちになれたと言う。

避難を終え、震災後初めて年を越した12年の正月にも、あちこちの仮設住宅から海辺の番屋に集まり、春祈禱を行った。獅子が家々を回るとい

昔ながらの形式は一度途絶えたが、団地整備後の18年1月に再開された。

同年2月、「竹浦獅子振り保存会」を立ち上げた。月1回、笛、小太鼓、大太鼓、獅子振り、唄の練習を行っていて、他地域に移り住んでも参加している子どもがいる。練習場となる集会所のホワイトボードには、「人が話しているときは静かに」「練習している人の邪魔をしない」「皆で褒め合う」「皆で楽しく練習」と、子どもたちに向



二次避難先でつくられた獅子頭はいまもたいせつに保管

けた決まりごとが書かれている。ふれあいや学び合いなどから、人としての成長もあと押しされていることだろう。

地域住民の数も減り、祭りごとの担い手不足などの課題もあるなかで、「皆で協力し合って、これからも続けたい」と、竹浦実業団団長の菊池嘉治さん。

獅子振りを「いろんな思いの詰まった、生きる、進む力の源」と語る、竹浦獅子振り保存会会長の阿部貞さんも、「幼い子どもたちが、いまの大人たちのようにデビューして、獅子振りをしてくれる日が楽しみ」と集落の未来に大きく期待している。



## DATA

## 中浜神楽

発祥の記録は残されていないが、中浜天神社の春祭りや、定例で奉納されてきた。12の曲目からなり、そのうち「剣舞」をアレンジして「中浜子ども神楽」が生まれた。

## 坂元神楽

地区の春祭りや集落を巡回して披露され、坂元神社の夏祭りや奉納されてきた。保存会によれば、一度途絶えた時期もあったが、ルーツをたどって丸森町の松沢山光明院から教えを受け、再開された。12の曲目からなる。



伊江村との子ども芸能交流会で、子ども神楽を披露する子どもたち。腰に人差し指と中指をそろえて添える所作や足をかかとから地面につける所作などに、坂元神楽の特徴が見える。篠笛は保存会の力を借りながら、囃子の演奏も子どもたちが行う

## 思いをともに 2地区の神楽を受け継ぐ子ども神楽

◎中浜神楽保存会・坂元神楽保存会（宮城県山元町）

## ポイント

- 震災後に、子どもたちを、地域を明るくするために、2地区の伝統神楽をつなげた「子ども神楽」が坂元小学校で始まった。2つの神楽保存会が一緒に指導し、山伏の作法や伝統の風習の意味も伝えている
- 今年2月には沖縄県の伊江島にある伊江小と交流会を開催。互いの地域の伝統芸能を学び合った

宮城県山元町の坂元小学校で、2月7日、「子ども芸能交流会」が行われた。動画で中継で結ばれた同小と沖縄県伊江村の伊江小学校が、地域の伝統芸能を発表し合った。同会は、沖縄県立芸術大学准教授の呉屋淳子さんからの提案により行われた。

静寂を破る法螺貝の音。一礼から始まる舞の所作は、篠笛と大太鼓、締め太鼓の囃子にあわせて、静かに動に転じる。「スサスサ、イザイザ」と軽快なかけ声を発し、剣を手にしなやかに舞う。――坂元小の4年生13人が、「子ども神楽」を披露した。伊江小の5年生12人も、国の重要無形民俗文化財の「伊江島の村踊」を実演。互いに感想を述べ合い、伊江小の児童は、「神様が舞い降りてきたみたい」と子ども神楽の印象を語った。

会を終えて、「緊張したが、やり遂げられた。今後、後輩には受け継いでほしい」と坂元小の尾柏茉莉亜さんは話した。「知らない子と交流する機会はなかなかない。楽しかった」

と同小の岩佐桃花さん。指導した中浜神楽保存会副会長の高山一男さん(69歳)は、「いい人生経験になったと思います。この先も神楽を忘れないでね」と児童に語りかけ、その成長に目を細めた。児童も、「ここまでできるようになったのは、保存会の皆さんのおかげです。厳しく徹底的に教えてくれて、時に冗談で笑わせてくれた皆さんが大好きです」(志小田新汰くん)と感謝した。

## 2保存会がともに活動

坂元小の4年生に、総合的な学習の時間に位置付けて、子ども神楽を教えるのが、中浜神楽保存会と坂元神楽保存会の両会員だ。舞や演奏の指導のほか、座学で作法の意味や地域の風習なども伝えている。お披露目の場合は、坂元神社の夏祭りや学習発表会、公民館行事などだ。

もともと中浜地区の中浜小学校では、「中浜子ども神楽」が保存会によって教えられていたが、東日本大震災の津波被害を受けて中

# 中浜神楽保存会・坂元神楽保存会・子ども神楽

## 「心を一つに」



子ども芸能交流会の最後に、中継先の伊江小に再会を誓って手を振る

断。指導役だった住民を失い、神楽の道具も流失した。被災した中浜小は、坂元小との合同授業を経て坂元小と統合した。一方、坂元地区にも坂元神楽があり、子ども神楽こそなかったものの、保存会が活動していた。2つの保存会が一緒に活動を始めた背景を、両会の代表者はこう語る。

「元気がない子どもたちを心配した先生が何をしたいか尋ねたら、『神楽をやってみよう』っていう声が出たみたい。俺も、家族を亡くしていて、そのことが頭にあって仕事にならないから、仕事を辞めていたんだ。それで身体が空いていた時に、学校から要請があった。やるのはいんどだけれど、道具が流されて何も無い。どうするか考えなければいけなかった(高山さん)。「世のなかを明るくするために子どもたちの力を借りなきゃ、という時に、学校から神楽をやりたい」という話が舞い込んできた。2つの神楽には囃子や太鼓の拍子など違いは

あるが、仲間うちで踊っているうちに慣れてくるだろうと思っていた(坂元神楽保存会会長の阿部清さん(74歳))。

——そうして、中浜子ども神楽の動作を基本に、坂元神楽の動作も取り入れ、2地区の思いを受け継いだ「子ども神楽」が始まった。烏帽子や衣装などの道具は、保存会と地域住民で、作成した。

2013年度から坂元小の授業で教えられ、19年度で7年目を迎える。

高山さんは、「子どもたちは身体を動かすのが好きだから、楽しくやっていると上のようになっている。『あの時おもしろかったな』っていう声は聞こえてくる」とうれしそうに話す。自身が20歳前後で神楽を始めた頃と重ねあわせ、「地元にあるものをなくさないように」という考えを一応もつてはいたが、昔は遊ぶものが何もなく、よ、神楽をして遊んでいたんだ」と振り返る。

阿部さんは、「伝統芸能は、伝承者・年代によつ

て形が変わっていくもの。山伏(法印)が伝承した点など、両神楽には共通点もある」と子ども神楽の意味を語り、「子どもたちが伝統芸能や作法を習うことは、将来的に人生の糧になる。私たちも伝統芸能をやってきてよかったと思うことが多い」と継承する意義を述べた。

### 2つの神楽の未来

「子ども神楽は財産」と語る、坂元小学校長の渡辺美由紀さん(56歳)。山元町では町教委から10年後を目安に町内の4小学校を1校に再編する話も出ているが、「存在感を保って定着させていくことができれば、10年後、中浜小学校と坂元小学校が統合した時のように子ども神楽が継承されていくと信じて」と渡辺さんは希望を口にしている。「他地区にもこういう神楽はある。伊江島みたいに、輪番制にするか」と高山さんは、伊江村との交流にヒントを得て発案していた。

現在、坂元神楽保存会では、中学生5人が後継者候補として活動している。子ども神楽を経験したことから興味をもち、入会したという。

中浜神楽は、現在も再開できていない。保存会としては、子ども神楽の指導のほか、流出した中浜神楽の面づくりを行っている。そうしたなか、高山さんは明るい表情で語る。「これからどうなっていくか。だんだん変わっていくと思うけれど、沖繩との交流もふくめて楽しみはあるんだ。自分たちの目標もあるし。ただ、住民の多くが出た中浜地区にどう後継者をつくるか。地区でも相談していきたい。まあ、昔の古狸みな集めてやってみるかなと思っっているんだ」。

2つの神楽の形を変えて継承された子ども神楽は、震災後の地区を結び、地域を再び明るくしてきた。一方で、変わらない、中浜神楽を舞い踊る姿が再び見られる日も願ってやまない。田



1軒1軒で住民と向き合って祈願

## 伝統とともに育つ地域

◎えんずのわり（宮城県東松島市）

### ポイント

- 子どもたちが地元の慣習に参加することが、同世代・多世代間のつながりを深め、成長するきっかけに
- 地域に根付いた慣習を通じて、地域のまとまりも促進される

「えんずのわり、とりよーば——」

宮城県東松島市月浜地区で、伝統的に毎年1月11日から16日に執り行われる「えんずのわり」のなかに「鳥追い」という行事があり、1月14日の夜、子どもたちが集落内の家々を回り、唱え歌を歌う。冒頭の唱え歌は、「意地の悪い（えんずのわり）鳥」を追い払い、穀物などの鳥害被害をなくしたいという思いに由来。集落の安全や繁栄を願う。

江戸時代から続くえんずのわりは、小学校3年生から中学校1年生にあたる年齢の男子が参加するのがしきたり。今年参加したのは、小学校5年生から中学校1年生の3人だ。

鳥追いでは、一人ひとりが枝を手にして、午後7時頃から、集落内の個人宅など20か所ほどで、庭や玄関から住民に向けて歌う。「じいさん、ばあさん、達者で長生きするように」など、定型の文句が10種類あり、家ごとに適当と思われるものを選んで、歌のあとに唱える。住民は「ありがとう」「頑張つてね」と、ご祝儀や差し入れを渡す。

「えんずのわりの期間中、対象となる子どもたちは共同生活を送る。もともとは、10数人が6畳程度の岩屋で煮炊きをし、寝泊まりし、身を清めて鳥追いを行ってきたが、現在は安全性を確保するために集会所で眠りにつく。朝食は岩屋でとり、そこから学校へ通う。

参加する子どもたちのなかで最も年齢の高い人が、一番大将と呼ばれ、作業の指示を出すなど、リーダー役を務める。かつては、食事の際に、良い働きをする人へのご褒美として味噌汁に角豆腐を入れ、働きの悪い人には、煮えていない人参を入れるなど、評価役も担っていたという。

今年、一番大将を務めていた、中学校1年生の鈴木凜生さんが、はじめてえんずのわりに参加したのは、東日本大震災後で仮設住宅に入居しているときだった。いまは他地域に暮らしていて、今回参加しているほかの2人と遊ぶ機会もなく、子ども同士で過ごす時間は一層貴重だ。

岩屋に大人がろうそくを寄進に来ると、子どもたちが

岩屋で共同生活

お神酒をふるまう。「○○君、大きくなったね」「上手に料理できたね」など声をかけ、集落の大人たちが子どもたちの成長を見守り、ふれあう機会にもなる。

### 地域は伝統とともに

鳥追いを終え、残り2日間の目標として、鈴木凜生さんは、「自分がどう2人を引っ張るかが来年にもかかわると思うので、頑張りたい」と話した。

「自分たちで囲炉裏で料理をして、家族のありがたみを感じるし、遊びよりもさらに重みのある思い出と経験になる」と語るのは、「えんずのわり保存会」副会長の鈴木信也さん。この集落で育った、えんずのわ

りの経験者で、凜生さんの祖父でもある。

地域の子どもの数が少なくなったことから、対象年齢の幅を広げることで、存続を図る。さらに、中心となつて取り組むのはあくまで子どもたちだが、囲炉裏にくべる薪の準備などを大人が手伝ったり、鳥追いの際に高校生が傍に立って助言したり、集落の先輩たちがゆるやかに支える。

慣習の価値をたいせつにし、伝統を途絶えさせないように、子どもたちも、大人も、えんずのわりに参加したことのない女性たちも、「伝統を残したい」と協力。慣習が代々地域の子どもたちを育て、慣習を守る力が、地域全体の結束にもつながる。

清



息をあわせて、唄え歌に声を張る

## 専門家に聞く地域づくりのヒント

### 「皆で考えて伝統文化の継承を」



東北歴史博物館 学芸員

小谷 竜介 (こだに・りゅうすけ) さん

埼玉大学大学院修了、1999年より現職。専門は日本民俗学。特に民俗芸能、工芸技術などの無形文化遺産に関心を寄せている。東日本大震災後は、地域社会に伝承されてきた民俗芸能の継承に関わるなかで、芸能に限らずさまざまな地域社会の文化を次世代にどう継承させるかということについて研究を進めている。

本特集では、伝統文化をテーマに、宮城県の各地での取り組みが紹介されている。それぞれ東日本大震災の津波により大きな被害を受けた地であり、そこで震災前より伝えてきた伝統文化を継承していこうとする取り組みである。三地域とも、継承していくためにさまざまな取り組みをしている。

伝統文化というと、昔から伝わるものを変えずに、そのまま伝えていくことに意味があると考えがちであるが、必ずしもそうとは言いきれない。紹介された三つの地区ともに、東日本大震災により従来どおりに伝統ある行事を行うことが叶わなくなったことから、現在できることを見出し、伝承するために実践している。そこで生じた変化は、伝統文化の継承という観点から考えると、必ずしも問題があるものではない。それは伝統を継承していくうえで最も重要なのは、関係する皆でいまだできることは何かを話し合い、今後の方向をつくるということにあるためである。そのなかで、これまで続いていた伝統がなんなのかを共有し、皆で実践していくことにこそ検証する価値があると言える。

伝統文化、特にお祭りや行事は昔から続いているというだけではなく、そうした文化を保持していたコミュニティの人間関係を再確認、再構築する機能があることが知られている。また、子どもたちなど多世代の人が参加

して行事を行うことで、教育的な側面があることも指摘されている。こうした部分にこそ地域社会で伝統文化が保持されてきている理由がある。こうして考えると、東日本大震災のあと、津波により大きな被害を受けた地域、まさに、今回紹介された三つの地域であるが、そこで伝統文化の継承に力を入れているというのは、伝統文化が持つもう一つの側面、地域を結びつけ継承していく力のためであるとも言えるのではないだろうか。

被災地において伝統文化を再開しようとする動きは、行事を行う楽しさや、信仰の側面から捉えられる。そのため、「復興」に必須なものと意識されにくいものである。しかし、今回紹介された三つの地域、そして、その他被災地の多くの地域で起こっている動きをみれば、伝統文化をつないでいくことは、地域社会を復興させていくうえで必要なことと言えるかもしれない。東日本大震災から8年を経て、インフラや住宅などの復興は完成しつつある。そのなかで伝統文化、そして新しい文化がどのように息づいていくのが、その後の暮らしをつくっていくうえで重要になる。

まちづくりという観点からも、そうしたソフト面の復興にもこれから力を入れていく必要があるので、読者の皆さまにも引き続きご協力いただきたい。



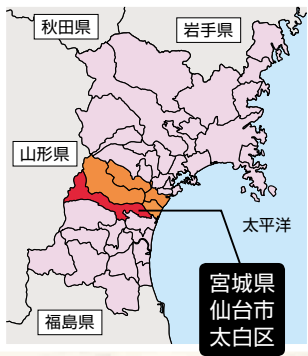


# まじわる！ 集団移転 & 災害公営住宅

第41回

## 清掃とお茶飲みを同時開催

あすと長町市営住宅  
(宮城県仙台市太白区)



力をあわせて、てきばぎと

2016年4月に自治会が設立された、宮城県仙台市太白区の「あすと長町市営住宅」では、住民による清掃が定期的に行われる。自治会である「ひまわり会」主導で、13階建ての住宅を2〜3つのフロアごとに6組に分け、毎月第2・4日曜日の朝9時から、毎回異なる組が当番を担う。夏の間は、気温が上がる前に

終えられるよう、実施時間を1時間繰り上げる工夫も取り入れている。

エントランスやエレベーター、自分たちのフロアの廊下、団地内のごみ集積所などを、多い時には30人ほどで力を合わせて綺麗にする。1時間ほどで清掃は終わり、参加者には、同市指定の家庭用ごみ袋をお礼として配る。そして、そこから1時間ほど、ほっと一息つきながら、集会所でお茶飲みを行う。

入居者同士で談笑し、交流を深める。これがこの集まりの最大の目的だ。

住宅の美化活動を通じて、自治のための責任を果たすことが、知り合いのいない人でも、ご近所とつながりをもつことにつながる。親と参加して、大人たちと親しい関係を築き、手伝いをしたり、あたたかく見守られている中学生もいる。

設立当初からひまわり



お茶飲みが入居者のつながりを深める

り会の役員を務める加藤弘一さんは、「清掃活動に出ることで、入居者同士、知らない人とも知り合える。仮設住宅での生活を経て改めて学んだ、『つながりをもつことがたいせつ』ということを大事にしなければならぬ」と語る。50歳代で、勤め先から帰宅して参加できるよう、自治活動の打ち合わせは平日夕方に行う。清掃後のお茶出しに来る熊谷洋子さんは、同住宅の夏祭りの手伝いをして、自治会役員と知り合った。「清掃のあとのお茶出しの手伝いをお願いできないかしら」と声をかけられた

ことがきっかけで、毎回足を運んでいる。「声をかけてもらったから、この場に入りやすかった。皆に会えるのが楽しみ」と話す。

熊谷さんに声をかけたのは、副代表の大山葉子さん。「皆協力的で助かっている」と言う。また、熊谷さんは、ほかの入居者とともに10人で、2人1組の訪問による見守りも行っている。月2回、独居世帯を訪れるもので、高齢者ばかりでなく、40歳代のもとにも何う。

また、見守りをする側と、してもらおう側で毎月食事会も開き、交流を図っている。

同住宅は、災害公営住宅として建設されたが、被災していない人の入居も受け付け、さまざまな人が混ざって生活している。もう1人の副代表の安藤譲さんは、「同じ屋根の下の生活だから、家族同様のつきあいが必要。清掃とお茶飲みへ多くの人来てもらう方法を考えた」と語る。



# 71回目 市民リレー 東北の元気

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。



残り2回となった2月28日の開催日には、コレステロールをテーマに健康講話があった

参加者と県看護協会職員とで、歌にあわせて手遊び

手遊びがきれいな形にそろって、互いに拍手

今回は...

## 健康・料理でつながる 仮設住宅の男の集い場

◎あっちむいてホイ(宮城県石巻市)

形を変えて6年以上仮設住宅で活動を続けてきた男の会「あっちむいてホイ」が、3月の集会所の閉鎖で、活動に節目を迎える。参加者は仮設大橋団地の住民と元住民約20人で、転出した人も車に乗りあわせるなどして参加する。月一回、料理づくりや県看護協会による健康相談会などを行っている。

仮設住宅の男性の集い場づくりを目的に、市健康推進課・市社会福祉協議会・県看護協会の共催で2012年に始まった「大橋メンズクラブ」が前身。15年3月の活動終了後、住民有志の自主運営に移って継続してきた。

代表の佐藤善男さんは、「杜協さんや皆がいるからできる。つながらななきゃダメなんだ」とこうした集まりのたいせつさを語る。「長年続いている男の集まりってそうはない。いろいろ話をし、情報共有もしている。男の人たちは楽しみにしている」と市社協復興支援課(エリア主任)の吉澤康友さん。今年2月には、看護協会

による健康講話があった。「アルコールは中性脂肪を増やす。休肝日を設けて」という協会職員の話に、「毎日飲んでいる人が元気いいよ」と参加者。焼酎を毎日飲むという阿部守さんが、「93歳」と年齢を明かすと盛りあがる。「限界をわかっているから。毎日でも量決めていってんだよね」と職員。

「何杯ですか」と質問が飛ぶ。「一杯だけ」という答えに周囲からは拍手と嘆声。「焼酎のメーカーはなんですか」「いいちこ」。周囲は笑いに包まれる。「長生きするお手本がここにいるからね」と職員。その後体操や輪唱を行い、「ああ今日も楽しかった」と参加者。次回が最後の開催となることに、「ここを残して、皆で市役所に言いにいくか。こういう場所が必要なんだ」と惜しむ声が出た。現在のところ活動場所の確保の難しさなどもあって、継続の予定はない。それでも、不定期での同窓会や参加者同士での互いの家の行き来など、つながりが続いていくことに期待したい。



皆、時間がいくらあってもしゃべり足りない



体操も楽しくにぎやかに



調理場からは熱々の料理が

今回は...

## 地元を離れた元婦人会

◎荒浜ボランティア婦人の会（宮城県亘理町）

東日本大震災で津波の被害を受け、危険区域となったことにより解散した、宮城県亘理町荒浜地区の「荒浜5丁目婦人会」。そのメンバーが中心となり、毎月「しゃべる茶会」と称したお茶飲みをしている。団体名は、「荒浜ボランティア婦人の会」だ。荒浜5丁目に住んでいた、60〜80歳代の女性23人が主だが、もともと他地区に住んでいた人も加入できる。

荒浜港町集会所で、午前10時から午後3時30分頃まで、体操をしたり、持ち寄った昼食を食べたりして過ごす。会員の特技や趣味を生かして、皆で籠やバッグをつくったりすることも。また、車に乗りあわせて集まる人がほとんどで、買い物などの用足しに付き合ってもらうこともある。

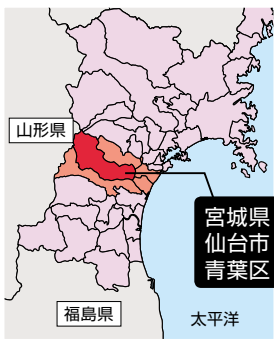
年に1回、旅行に出かける「移動茶会」を行う。また、同会の活動でなくても、同じメンバーが代表の永浜由紀子さんの畑で野菜を育て、収穫し、しゃべる茶会で調理して食べたり、環境美化

活動に取り組むこともある。

震災以前は、日中、玄関を施錠せずに外出したり、ご近所同士で「何してるのー？」と扉を開けて声をかけたりすることが日常的だった、荒浜5丁目の住民。仮設住宅に入居していた2011年7月に、離れ離れの顔なじみに会いたいという思いから、会が発足した。町内3か所の仮設住宅団地の集会所を利用し、毎月どこかに集まった。

復興のために整備された団地に転居したり、そのほかで土地を購入したり、それぞれが自宅の再建を果たし、仙台市など、町外に暮らす人もいる。「被災によって、交流が断ち切られた」と話すように、転居した先での新たな近所づきあいになじめないのだという。

代表の永浜さんは、「この会が生きがい。支え合いながら、長く続けたい」と語る。「離れても同じ境遇の人同士だから、気持ちを理解し合える」と、昔から続く関係性、憩いの時間が、互いを支えている。清



DATA

八幡杜の館

〒980-0871  
 宮城県仙台市青葉区八幡三丁目1-11  
 TEL: 022-211-7077  
 開館時間: 毎週木曜日から日曜日  
 午前10:00～午後4:00 (閉館日: 月・火・水曜日)  
 運営は、八幡地区まちづくり協議会からの交付金とサポーターの皆様の年会費によって主に賄われています。安定した運営を継続させるには、まだ多くのサポーターの皆様のお力添えが必要な現実です。仙台北西部の文化活動の拠点、地域住民の憩いの場として、地域の皆様とともに寄り添いあいながら運営していきたいと願っています。  
 このような趣旨にご賛同いただけるサポーターの皆様を募集しています。  
 年会費: 一口1,000円 (何口でも結構です)  
 ご賛同いただける方は、上記連絡先にご連絡いただきたく存じます。



鮮やかな黒塗りが目を引く、八幡杜の館の外観



以前行われたさくらまつりの光景。桜の木の下で、学生による吹奏楽演奏がお披露目された



杜の館内部の展示コーナー

今回は...

地域の宝は形を変えて

◎八幡杜の館(宮城県仙台市青葉区)

かつて、八幡では、大崎八幡宮とともに、江戸時代から続く「天賞酒造」という造り酒屋の酒蔵が、長く象徴的な存在であった。1992年には、杜の都の歴史を伝える遺産として、仙台市の都市景観賞も受賞している。しかし、2004年に天賞酒造は川崎町に移転することになった。「なんとかしてこの地域の宝を残せないか」という声が地区住民からあがり、行政との間で話し合いがもたれた。その結果、仙台市が土地を購入して、建て物(天賞酒造店蔵)は移築して「八幡杜の館」として生まれ変わり、庭園(天賞苑)は「中島公園」として整備された。建て物には当時使われていたままの構造材を一部用いるなど、かつての面影を最大限に留める形で移築が行われた。

現在、八幡杜の館は、地域の文化活動の拠点として幅広い世代に親しまれている。管理運営は、住民有志の「八幡杜の館運営委員会」が担い、住民ボランティアが交代で運営している。住民の手で無理なく長期的に継続させていける形態を考えて、開館日は週4日としている。

館内には天賞酒造を紹介するパネルや古地図、寄贈された美術

品などが展示されていて、無料で入場できる。また、一般向けに貸し出しを行っていて、常設展やワークショップ、コンサート、落語会など多様な催し物が開かれている。

昨年10月には、小学生の絵画コンクールの表彰式・展示が行われた。「八幡町のいいところ」と題したコンクールは、子どもたちがまちの魅力を再発見する機会ともなった。総合学習の授業の一環としても活用されるなど、周辺の学校とも積極的に連携をして、若い世代に地域へとかかわってもらう入口にもなっている。

中島公園は、毎年1月には、仙台の風物詩であるどんと祭り(松焚祭)の裸参りの出発地点としてにぎわう。毎年4月には、満開の桜の木の下でさくら祭りが催され、多世代がふれあう。

このようにして、地域の宝は形を変えて受け継がれて、新たな交流拠点として地域をつないでいる。

八幡杜の館運営委員会副委員長の槻田一彦さんは「今年も4月14日10時から、中島公園で桜まつりが開催されます。皆さんお越しください」と話した。田



「花山音頭」のメロディーにのせ、  
地域を走る移動販売車

## 「一軒一軒玄関先まで」。移動販売車で買いたいもの支援

### 移住促進や空き家活用も展開

宮城県栗原市西部の中山間地域である花山地区で、移動販売が2018年9月から始まった。

毎週金曜日、約3時間かけ、地区の希望世帯を一軒一軒回って、食料品や日用品を販売。利用者は、「こういうものがないと生活できない。つくづくありがたみがわかる」「寒い時も玄関先まで来てもらえて助かる」「部屋着で気軽に買えるのでいいのいい。(店主と)いろいろな話をして、情報交換もできる」と感謝する。高齢化率約50%超と過疎化が進み、交通の利便性の低い地区で、移動手段をもたない住民の生活を助けている。

地区内の「ヤマザキ ショップ新茶屋」店主でもある佐藤倫治さんと運転

手2人で接客販売する。パン粉がほしいなどと要望があれば次回以降仕入れ、電球が切れている話が出ればサービスで交換する。住民の様子も気にかけて、見守りの機能ももつ。

移動販売車の運営母体は、行政区長ら地区住民35人で構成される「一般社団法人はなやまネットワーク」だ。地域の課題解決を目的に14年に設立された「花山地区『小さな拠点』づくり推進委員会」を、18年5月に法人化して移行した。法人化したことで、団体名義の契約や登記を行え、委託事業を受けやすくなる。18年度は「宮城県買い物強化支援事業」に採択され、県(1/2)と市(1/3)の補助、法人負担(1/6)で、車両代な

どの事業費を賄った。法人はプロジェクトを設置して活動。「買いたいもの支援プロジェクト」のほかにも、多様な取り組みを行う。

「空き家活用プロジェクト」は、地区の空き家を入居可能な物件にして、移住者の受け皿を目指す。掃除や家財の片づけをし、持ち主が不要と認めたものについてはフリーマーケットで販売する。

「交流・移住体験プロジェクト」は、「かがやく女性たちと過ごす花山いなか時間」を掲げ、年2回移住体験プログラムを実施。移住希望者と地区住民が、地域行事や農作業などで交流する。法人事務局には、地域おこし協力隊が所属し、プロ

ジェクト推進業務にあたる。同隊の村山喜子さんは、「人と密着する協力隊の典型的な活動。地域のひとふれあって、どんな人がいるか知り合っていくのが大事」と話す。

買いたいもの強化支援事業は18年度で終わるが、引き続き法人で運営する。「当初考えていた十分な利用者がいて、補助事業として目標を達成できているのは幸い」と事務局長の佐々木徳吉さん。法人として利用者の推移を見守り、広報などでバックアップする予定だ。

今後は、「独自の、交流機能を兼ねた高齢者の冬季居住施設建設が目標。まずは、若い人に来てもらえる地域づくりをいいたい」と佐々木さんは話した。



栗原市社会福祉協議会の花山高齢者生活福祉センターで住民と(左端が佐藤倫治さん)。吹雪くなく、施設前まで来てくれる移動販売車の存在はありがたい



車両には冷蔵機能もあり、新鮮な魚や肉、卵、果物などを扱う



買った商品を玄関先まで届ける

# どろいでモサロン

第19回

自然なつながりと支え合いを生み出す



## モーニングで交流と支え合い 喫茶店「るまん」

岐阜県御嵩町

岐阜県御嵩町の町役場から徒歩3分ほどのところに、喫茶店「るまん」がある。

朝8時。開店と同時に次々と客が入り、ほぼ全員がモーニングセツトを注文する。ぶ厚いトーストに、ゆで卵、野菜サラダや果物、コーヒーが付いて400円。開店直後は出勤途中の男性が多く、しばらくすると家事を一段落させたらしい女性の姿が目立つようになる。年齢的には中高年層が中心。特に午前9時〜正午の時間帯は、70歳以上の人たちが大いににぎわう。

「シルバーカーを押して来る90歳過ぎの女性もいますよ。昔は若い人が多かったんですが、店と一緒にお客さんも私も年を取りましたね」と語るのは、店を夫と二人で切り盛りする木村美知代さん（67歳）。開業は1982年で、今年37年目を迎えた。

「ほとんど毎日来る」という男性（68歳）に店の魅力を聞くと、「ここに来ればたいがい知り合いがいて、気軽に話ができる。ママやマスターとの会話も楽しい」と話してくれた。

一人で来ても友人の姿があれば、同じテーブルで和気あいあい。見ず知らずの人がいても打ち解

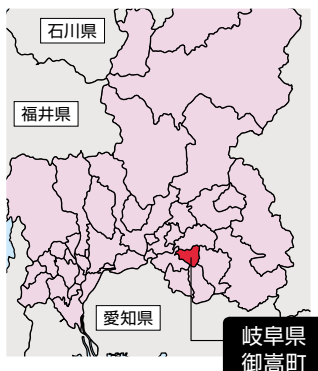
けるのに時間はかからない。

週に一度集まってモーニングを食べるという80歳代の女性7人のグループにも聞いてみた。「ここに

来る日が楽しみ。仲間と会って話をすると気持ちがあらぐ」「おしゃべりしながら暮らして役立つ情報をやり取りできる」「何時間いても気兼ねがない」。毎週火曜の朝9時頃、それぞれの家から歩いて店に来て、正午近くまで一緒に過ごす。7人のうち6人は、ひとり暮らし。いつも連絡を取り合い、お互いの家を行き来して、おすそ分けやお茶飲みをしている。体調を崩したり、困りごとを抱えた人がいれば、すぐに気づいて手を差し伸べる。

さらに常連数人に店の魅力を語ってもらった。「昔からなじみで、定年退職しても気後れせず通える」「ここでモーニングを食べるのが日課。そうしないと二日が始まらない」「好きなときに来て、何時間でもいられて、帰りたいときに帰れる」。

御嵩町は、岐阜県中南部の中山間地に位置。人口は1万8379人（7344世帯）で高齢化率30・4%（2018年12月1日時点）。町内に喫茶



店が十数軒あり、「るまん」同様、多くの住民に親しまれている。暮らしのなかに喫茶店がある。その生活文化が交流を生み、孤立を防ぎ、支え合いを育んでいる。

木

# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ

## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 9年目を迎えた3.11に想うこと

あの日の朝からの行動を不思議と鮮明に覚えていることに気づいた。地震の揺れのすごさ、経験のない揺れは忘れられない。けど、どうしてあの朝の行動、どうでもよいことなのによく覚えているのか？ 午後研修会（テーマは覚えていないが、多分虐待対応の研修？）があり、主催者側でも、担当でなかったのに、近くのスーパーで東京渋谷にある有名店の臨時出店の初日ということで、研修の準備は担当任せにして馳せ参じていた（要は、サボり）。期待を見事に裏切る商品の陳列にガックリしたこともよく覚えている。サボりの後ろめたさからか、どうでもよい品を購入したことは覚えているが、何を買ったかはよく覚えていない。

そして研修会場へ。年度末なのに熱心な(?)連中がよく集まった。講師は、権利擁護にかかる活動をするリードする若手弁護士（バリバリの中堅なのに、若々しいので）と社会福祉士の重鎮（私の師匠、ただし私よりひと回り若い）。この時期、私はそれこそ『ボーッと生きていた』と思う。60歳になり、「老い」という言葉に囚われていた。年をとったと言うか、まだ若いと思うかを迷っていた。気持ちとからだの両方が中途半端でした。研修では、師匠に『喝』を受けることもあり、少々苦痛な場でした。そして14時46分。

地震直後の数日は、現実を直視できずにいた。被災地を駆け巡り、仲間の安否確認をしながら、要援護者の支援に奔走する師匠から「津波被災地」を縦走するので「来い」と言われて、山元町から気仙沼まで一日で走破。海岸部が例外なく被災していること、街が消えたことを突き付けられた。私自身、地震被災者と想っていたのだが、間違っていました。

あの日から早や8年。支援事務所を預かって7年半。サポセンの皆さんとかかわることができたのが、最高の出会い。素敵なコーディネーターを活かすことできたのが、最高の功績(?)。もう、そろそろ若い連中に託そうと思います。来年の春をもって、支援事務所を閉めようと思います。いま少し、おつき合ってください。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章



### 若いときの孤独と寂しさ、 老いの孤独は？

大学を卒業して就職したまちでの住まいは、陽当たりの悪い文化住宅だった。気楽さと孤独が共存するひとり暮らし。残業をして帰宅する。薄暗い扉を開けて『ただいま』と言って、『お帰り』と自分で応える。テレビを見ながらのひとり言がいつの間にか日常となり、寂しさを紛らわすささやかな方便となった。ときどき、寂しさに発狂しそうで柱にしがみつきたい衝動にかられた。自宅から歩いて1分のところに、仕事でお世話になっている女性の家があった。その方の名前が母の名前と同じで、年齢も近く親しく感じた。寂しさに耐えられないとき、その方の家を訪ね、お茶やお茶づけをご馳走になり喋った。そこは私のなかでは、どこか母のような場所だった。そこに行くと、“ひとりではない”という感情が湧いて心が温かくなった。その頃想ったのは、若いときの孤独はまだ将来があると思える。しかし、高齢になった時の孤独はどうなんだろうかと。先のない不安と孤独による寂しさを想像して恐ろしくなったのを覚えている。

鈴木所長お勧めの映画『ボヘミアン・ラブソディ』を観た。ロックバンド・クイーンのボーカル、フレディ・マーキュリーの半生を描いた作品。感動した。同時に移民の子ども、出っ歯によるコンプレックス、父親との葛藤、同性愛、不治の病。華々しい成功の裏で深まるフレディの“孤独”、そして葛藤しながら成長していく姿が、映画全体を流れる一つのテーマのように感じた。

映画『ガンジスに還る』を観た。自らの死期を悟った77歳の父に付き添って、息子はガンジスの聖地パラナシで短いときをともに過ごす。死への旅立ちの“覚悟”ができた父は、息子に家に帰るよう突き放した。『心の声に従うように』という言葉を残して。人は老いのかで生じる孤独を、そして死への受容をどう整えていくのか？人は皆、どこかに何がしかの寂しさ、孤独を感じて生きている。エネルギーに満ちた若いときの孤独と寂しさ。体力、気力などの衰えを自覚し、死を身近なものに感じるようになった老いの孤独と寂しさ。人生を自分なりに“精いっぱい生きた”と肯定できれば、生への執着が少しずつ薄れていくのかもしれない。

### 平成30年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

<「地域福祉コーディネーター基礎・実践研修」受講のための事前研修>

【気仙沼会場】2月25日(月)～26日(火) 宮城県気仙沼合同庁舎

講師：永坂 美晴(兵庫県明石市社会福祉協議会 地域総合支援センター 地域支え合い推進担当係長)

岩城 和志(兵庫県淡路市社会福祉協議会 事務局次長)



地域生活支援員による見守り訪問の様子。直接訪問は住民にあわせて週一回～月一回程度の頻度で行う



## 暮らしを支える支援員35

### 7年間積み重ねてきたもの

石巻市社会福祉協議会  
(宮城県石巻市)



石巻市社会福祉協議会復興支援課は、市内の応急仮設住宅とみなし仮設住宅、復興公営住宅について、アドバイザー1人、エリア主任11人、副主任1人、地域生活支援員31人の44人体制で相談支援や見守り事業などを行う(2019年2月時点)。6エリアごとに配置された支援員は、2人一組で応急仮設住宅を毎日巡回する(防犯目的で閉鎖した団地も回る)。

取材に応じてくれた復興支援課(エリア主任)の吉澤康友さんと岸野<sup>ういち</sup>宇一さん、渡辺久展さんは、元地域生活支援員だ。「住民さんと直接接して、していいこととしてはいけないことをよく知っている。実際に現場を歩いてきたことが強み」と吉澤さん。「エリア主任として、現場の支援員さんの気持ちもわかる」と岸野さん。

支援員としての仕事を、「現場で手法が生まれてくる。それを共有して、いいところを取り入れていた」と岸野さんは振り返る。情報共有のために、毎日エリア内でミーティングを行うほか、そこで出た課題を、主任や関係機関が集まるケース会議にあげて検討する場合もある。2か月に一回は、エリア間でもミーティングを開催する。

住民と信頼関係を築くには、「気遣いや礼儀、日々のあいさつと傾聴」(岸野さん)が大事だと言う。支援員は「住民の日頃の生活を把握するようにしていた」(吉澤さん)。たとえば、部屋が汚くても、それが本人の生

活スタイルなら、見極めて尊重する。

現在は、信頼関係が築かれ、傾聴すると安心されて、『聞いてくれてありがとう』と言われる。「支援員もスキルがあがった。以前は住民さんを質問攻めにしていたが、何気ない会話をして様子を窺っている」(吉澤さん)。

7年の間で孤独死がおこって報道されることもあった。他方で、支援員が住民の異変に気づいて保健師につないだり、病院に緊急搬送したりして、命を守ったこともあった。しかし、セーフティネットとして機能したことが、取りあげられる機会は少ない。

震災8年目の3月を迎える。「最後は大事。信頼関係を崩さないよう、初心に帰りたい」と岸野さんは襟を正す。

住民の転居時は、生活状況や支援機関などの情報を支援員が記録したフェイスシートを、復興公営住宅を支援する復興班に引き継いでいる。「相談対応をして、スムーズに次のステップに移っていただけるように」と渡辺さん。支援員のこれまでの蓄積を基礎に切れ目のない支援が行われ、住民の自立した生活やコミュニティ構築をあと押しする。田

DATA

#### 石巻市社会福祉協議会

〒986-0814 宮城県石巻市南中里三丁目11番1号  
電話番号 0225 (96) 5290 FAX 番号 0225 (96) 5223

### ☆次号予告 特集「地域に広がる若者の思い」

#### 平成30年度 宮城県地域福祉コーディネーター研修事業

<地域支え合い活動実践研修2 お宝の発見から発表会の開催の方法を学ぶ～第4回 お宝の発表会の準備・開催と講座のまとめ～>

【塩竈会場】 2月21日(木) 塩竈市壱番館庁舎

講師:志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)  
酒井 保(ご近所福祉クリエイション主宰 ご近所福祉リエーター)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

#### 平成30年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修事業

<生活支援コーディネーター基礎・実践研修>

【仙台会場②】 3月11日(月)～12日(火) 宮城県自治会館

講師:大坂 純(東北こども福祉専門学院 副院長)  
高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)  
志水 田鶴子(仙台白百合女子大学 人間学部 准教授)  
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail johoh@clc-japan.com

#### リニューアルのお知らせ

いつも本紙をお読みいただき、誠にありがとうございます。東日本大震災の被災者の暮らしを豊かにすることを目指し、2012年9月に創刊いたしました本紙は、住民同士の支え合い活動や被災者支援の取り組みなどを毎月ご紹介して参りました。震災発生から8年が経過するにあたり、当編集委員会では、本紙が一定の役割を果たしたと考え、2019年4月よりリニューアルすることといたしました。発行頻度を隔月(偶数月発行)にし、紙面の構成も変更させていただきます。

今後も被災地域の現状をお伝えし、日頃からの地域のつながりのたいせつさを発信して参りますので、引き続き、ご理解、ご支援のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

(東北関東大震災・共同支援ネットワーク 地域支え合い情報編集委員会)